

## 無言の悲鳴を上げる高野山のよき隣人たち(和歌山県)

樹木医 山本 聰洋

キーワード：世界遺産、金剛峯寺、大杉林、高野六木、ダイバック

### はじめに

弘法大師空海入定の地、日本三霊場、世界遺産、宗教文化財の宝庫、開創1200年、今更改めてご紹介するのはもはばかられるほど、あまりにも有名すぎる霊場高野山ではありますが、訪れた人だけが「どうもここはほかの山とは様子が違う」ことに気が付きます。それは、高野山という山の頂上がどこを探しても見当たらないからです。外八葉と呼ばれる海拔千m前後の外輪山が取囲む、東西約5km南北約3km・面積約630haの山上盆地とその周辺一帯を指して「高野山」と呼ばれるのです。高野山というのは、どうやら山の名前というよりは地名と言った方がいいのかもしれませんが。

### 1 高野山の景観

全国各地に残るご神木などの巨樹・巨木は、常緑広葉樹の孤立樹であることが多いようですが、私が居住しているこの故里「高野山」では、温暖で降水量の多い南国紀州の地にありながらも、平均海拔800mの高地にあるため、冬の最低気温がマイナス10度以下に下がることも稀でなく、照葉樹林帯を構成するスダジヤクスノキなどの高木性常緑広葉樹は生育することができません。それにかわって登場する風景の主演は、「大杉」や「大杉樹林」、そしてその脇を固めるメンバーは、よく「木曾五木」と並んで紹介される「高野六木」のヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガ、アカマツとなっています。

急峻な山々が連なる広大な紀伊山地の只中、八葉の峰々が周囲を取り囲んだ山上の盆地。下界から隔絶したこの地に、あたかも突如現れる宗教建造物と高野六木の大樹とが織り成す荘厳の小宇宙。しかし、今ここに立ち現れている風景は、怪訝に思われるかもしれませんが、高野山1200年の歴史のなかで、かつて一度も経験

したことがない風景でもあるのです。もちろんこれは高野山だけに当てはまることではありませんし、どの景色も刻一刻と姿を変えています。今、眼前にある景色は厳密には次の瞬間にはどこかが遷移しているのですが、ここでは大きな意味での景観様相としての風景、世界遺産登録という誉れ高き評価を頂戴した「紀伊山地の霊場と参詣道」高野山の風景を意味しています。

高野山には二つの中心地があります。

その一つは「信仰」の中心「奥の院」です。一の橋から弘法大師御廟に至る2kmの石畳参道沿いに、和歌山県指定天然記念物「奥之院の大杉林」(昭和33年指定、規模約17ha、約1,500本)が広がり、高野山山上の最長老たちが集い御座します。調査によれば、彼らの最高樹齢は500～600年とされており、時代としては室町でしょうか(写真1)。

そして、もう一方が「宗教上」の中心である根本大塔などの諸塔を配する壇上伽藍です。平成27年「高野山開創1200年記念大法会」を記念して再建された伽藍中門の主柱として使われたヒノキは、この伽藍を取り巻く樹林から伐り出されました。樹齢は400年弱とされており、時代は桃山あるいは江戸となります。

創建当時、この地は沼地が大半を占める湿原地帯であったようです。その後幾度も落雷、火災、全山焼失という苦難を乗り越えながらも、「高野六木の留木制度」(伐採の制限)や「登山道周辺の禁伐」「野焼きの禁止令」等に代表される森をまもる知恵となり、自然を大切に高野山の尊厳を護持してきた先人たちの智恵と、そして実践努力の積み重ねが、今に至るまで営々と継承されてきた賜物と言えます。度重なる大火や、乱伐による用材の枯渇、水源涵養、薪炭林の確保等々、利便の悪かったこの地であって、それらは高野山存続の根本に関わ

る切実な問題として、その必要性に迫られて行われてきた面が強かったでしょう。風致景観や環境形成はあまり意図していなかったのかもしれませんが。しかし結果として、現在の高野山固有の風景創造に、大きく結びついていったと言えます。人と自然とが穏やかに、しかし深く結びつき共鳴調和しつつ醸成された固有で美しい景観を「文化的景観」と称し、高野山が世界遺産として登録評価の鍵となった言葉のひとつでもあります。

## 2 巨樹と信仰

人は巨樹の前に佇むとき、独特の感情に満たされます。仰ぎ見ても全貌を望めない巨体への率直な驚きがまずあります。そしてこの地球上の同じ生命体としての共感のなかにも、彼らが人の寿命をはるかにしのぐ長い年月を、ここでじっと動かず生き抜いてきたという事実が目前にあることへの驚きもあります。しかし、そういった一連の最初にもつ感情の次に、なにやら奥底の方から、とても懐かしく、暖かく抱かれるような不思議な感覚が湧き上がってきます。そしていつしか普段とは違った、謙虚で、素直で穏やかな気持ちの自分がそこにいることにも気付かされます。全国各地に残るご神木などに象徴されるように、古来より巨樹そのものが人々の信仰対象となっている事象も数多く見受けられます。人は彼らに出会うとき、かつて彼らの元で、また彼らなしでは自らの生存すら危うかった、原始のころの光景を脳裏に呼び覚まされ、そしてほとんど無条件に畏敬の念を抱かずにいられないのかもしれません。

高野の最長老たちが集える奥の院大杉林は、これに加え、独特の荘厳と不可思議を醸し出しています。彼ら大長老たちの懐に抱かれるとき、巨樹そのものに覚える気持ちに加え、そのあまりの巨大な存在群に圧倒されつつも、人にはどうすることもできない、何かとてつもない大きな力の存在を肌で感じ、その力の庇護のなかに誰もが赤子同然に抱かれている自分があることを悟る思いに満たされます。奥の院は、比類のない圧巻の厳かな聖域となっています。



写真1 和歌山県指定天然記念物「奥の院の大杉林」弘法大師御廟付近



写真2 高野山金剛峯寺東面 高野山の中心地付近の大杉樹林 ダイバックが起きている

高野山内全域においても、この大杉林には及びませんが、宗教建造物と大杉樹林がモザイク状に混然と練り広げられ、山上の霊場としての尊厳を高めるとともに、各地からの参詣者や世界遺産登録後増加の一途となっている世界中からの観光客の、心と体の浄化体験ゾーンとして絶大な人気を誇っています(写真2)。

## 3 高野山の樹林の現状

さて、かつて経験をしたことのない風景と申し上げました。かつて経験したことのない世界遺産の誉れ高きこの風景はまた、かつて経験をしたことのないような困難や試練をもたらすことともなりました。前出の奥の院大杉林は天然記念物指定や特別母樹林として、また世界遺産コアゾーンとして厳重に保護されてはいますが、地下水位が高いことから根系が極めて浅く、地上部は数十万基とさえいわれる膨大な墓石群に覆われているため根系の広がりが限られることから、台風による風倒害を受けやすい個体が多くなってきています。また、スギの巨樹単純林であり、鬱閉度はそれほど高くはありませんが、林内所々にあるギャップでさえ陽地性のスギの発芽成長には向かない日照であることから、後継樹の生育は見られず、墓園が地表部を覆うため耐陰性の強い樹種であるコウヤマキやヒノキの後継樹の生育もほとんど見られません。

したがって、この大杉林の将来は、と言っても数百年あるいはそれ以上という単位かもしれませんが、大杉林としては、いつか終わりを迎えざるを得ない宿命なのかもしれません。現在、風倒樹は速やかに伐除搬出され、傾斜樹はケーブリングにより支持されるという保全管理がされていますが、樹林維持というよりは参拝者の安全



写真3 痛ましい樹形

確保上の意味合いが強いもの  
と思われる。

この大杉林の場合は指定が  
手厚いので、十分ではないかも  
しれませんが、比較的山上では  
対応が恵まれていると言えます。  
高野盆地内全体にモザイク状に  
散在分布する比較的若い200  
～300年生未満の個体や樹林  
は、保護指定がそれほど強くな  
かったり、また無指定であつた

りと、保護の目が向かないことが多く見受けられます。そのような個体や樹林は、大杉林のような面的な広がりが  
ないため、バッファゾーンがほとんどなく、大都会と同様に人間活動のさまざまなストレスの矢面に立たされています。根圏内利用に伴う過酷な容量的制限、他樹との根圏競合、オーバークース踏圧害、直接加害による傷害腐朽、また、林床美観重視のための過度な除草や、落葉清掃による土壌表層の撥水硬化等々、人と巨樹が近接して存在することによる弊害です。ただでさえ樹齢を重ねるごとに、維持コストの増大に伴う彼らにとって、この過酷な試練の連続は、ゆっくりと確実に縮小均衡のダイバック(先端枯れ)となって現れはじめます。そして、景観の異常事態が衆人の目にも明らかとなって初めて慌てることとなります。しかし、落下危険のある枯枝の切除以外に思いが及ぶことなく、除去後一旦は視界から枯れ枝がなくなり、景観も樹木も回復したものと暢気に思い込みますが、無口で動かない隣人のストレスが緩和されたわけでも、樹勢回復の対策がとられた訳でもないことから、早晚ダイバックが再び現れ切除を繰り返す羽目となります。そしてその結果は、寸詰まりの痛ましい畸形樹形をさらすこととなっていきます。巨樹によって景観のスカイラインを構成していた世界遺産高野山の山上風景も自ずと劣化することとなり、世界遺産登録の根拠のひとつであった人と自然とが穏やかに、しかし深く結びつき調和しつつ醸成された固有で美しい景観である「文化的景観」は徐々に失われはじめ、世界遺産としての存続さえ危ぶまれる事態が危惧されます(写真2、3)。

#### 4 今後の保護管理に関する提言

この悪夢のようなシナリオは、実は現在一部で既にか  
なりのレベルで進行しています。静かで無口なよき隣人  
に必要だったのは、一時的で美観的な処置でしかない  
枯れ枝除去、いわば人間の安全と得心のためのパフォー  
マンスではなく、植栽基盤の改善や、良質な治療、十分な  
養生管理であることは明らかでしょう。

大きな広がりをもつ森林を保護するための心得として  
「木を見て森を見ず」という警句があります。しかし、人  
為ストレスに直面する個体や小規模樹林では、個々体によ  
って事情が相当異なっているのが実情ですので、林業  
施行のような一斉一律の画一的発想では、手厚く繊細  
な保護の実現には遠く及びません。「森を見て木を見ず」  
という警句が、故事辞典に記載があるかどうかは分かり  
ませんが、人と樹木が近接し良好な共存を目指す「文化  
的景観」と呼ばれるような空間では、個体の識別管理と  
個体別調査診断カルテの台帳整備という個体管理の発  
想が非常に重要となります。一刻も早く無言の悲鳴を上  
げている静かで無口なよき隣人たちが、回復は望めなく  
とも、今以上無惨な姿とならないよう願ってやみません。

「山高きがゆえに貴からず。樹有るをもつて貴しと為す」  
というよく知られた「実語教」冒頭の例えがあります。本  
意は知恵を磨くこと、学ぶことの大切さを説いたものな  
のですが、字句そのものの直接的な意味からは、何か  
むやみな乱伐を禁じ自然を大切にしてきた先人たちの  
姿勢と重なる気がしてなりません。「実語教」は江戸時  
代までの初等教育の教科書的な存在で、勤勉実直な日  
本人文化の根幹形成に強く影響したとされています。一  
説には「実語教」はお大師さまの作出であるとも古伝さ  
れていますが、定かではありません。「実語教」では次に、  
「人肥(ゆたか)なるがゆえに貴からず。智有るをもつて貴  
しと為す」と続きます。後世に禍根を残さないためにも、  
今に生きるものとして今こそ万難を排してでも、あらゆる  
知恵を絞らなければならない時ではないでしょうか。Web

山本聰洋(やまもと としひろ)

(有)山本園代表。日本樹木医会 業務執行理事、近畿地区協  
議会会長、和歌山県支部長。和歌山県造園建設業協会会長。

無言の悲鳴を上げる高野山のよき隣人たち（和歌山県）  
写真資料（カラー原稿）



無言の悲鳴を上げる高野山のよき隣人たち（和歌山県）  
写真資料（カラー原稿）

